

# アンケート調査分析

## 1 アンケート調査分析【単純集計】

対象者：高校2年生

対象者数（分析対象者数）：高校2年生6,361人（男子3,189人、女子3,106人）

（但し、性別不明61件、矛盾回答1件、途中放棄4件は分析から除外した）

- \* 高校生の現状の概要
- \* その他、全設問に対する結果の詳細は、添付の集計表を参照のこと
- \* ここでは、特徴的な結果のみを紹介
- \* 重要な知見は、太字下線で表示している

### ■ 学校生活の現状

#### 1. 友人への信頼感（問2）（問3）

- ・ 一番親しい友人への信頼感は、「とても信頼している」が60%前後（男子57.7%、女子62.1%）に留まり、かなりの高校生が一番親しい友人を心底信頼しているのではない可能性が示された。
- ・ 親しい理由で50%を超えたものは、男子では、「気が合うから」が72.1%で最も高く、次が「何でも話せるから」が52.1%で半数を超えていた。女子では、「気が合うから」が76.2%、「何でも話せるから」69.9%、「優しいから」56.6%、「おもしろいから」52.3%、「自分の気持ちをわかってくれるから」52.1%であり、上位2位の項目は男女共通していたが、女子の方が50%を超える理由数が多かった。

★ 一番親しい友人でも全面的信頼感を持っているわけではない。

#### 2. クラスの授業中の雰囲気（問4）

- ・ 最も多かったものは「まあまあ落ち着いている」で男女とも45%前後であった（男子41.5%、女子48.2%）。一方、「一部の生徒が勝手な行動をとっている」/「クラス全体がバラバラでほとんどの生徒が勝手な行動をとっている」は男子18.3%、女子14.7%であり、20%弱が学習に適切な状況とは言いがたいことが明らかとなった。
- ・ 高等学校の生徒の授業中受講態度に対する憂慮すべき実態を示しているものと考えられる。

#### 3. 学校で1人で過ごすことに対する意識

##### 「昼食時間など、友達と一緒になく1人であることをどう思いますか？」（問5）

- ・ 男女とも、「非常に恥ずかしい」「やや恥ずかしい」という気持ちを持つ生徒が、男子40.0%、女子50.3%とかなりの割合に達していた。「非常に恥ずかしい」と答えた生徒も男女とも10%を越えており、学内で個人で行動することに対する強いネガティブ感が示され、“友人”グループ帰属願

望が強く、一緒に食事をする友達がいないなどの場合にはストレスを感じる可能性があることが示唆された。

★ 1人で過ごすことに対する羞恥心等のネガティブ感を持つ生徒が多い。

4. 高校生から見た本人および周囲の大人の間度の比較（問6、問7、問12、問16）

- ・ 人間度の定義：本人が世の中で一番尊敬している人の人間度を100度とした場合、本人、先生、男性保護者、女性保護者の人間度をどのくらいかをたずねた。
  - ・ 自分自身の人間度の平均値は男子42.1、女子40.8と男女とも40くらいであった。一方、先生（本人がこれまで出会った先生の中で最も好きな先生に対する回答）の人間度は、男子80.6、女子83.1、男性保護者の人間度は男子69.6、女子69.4、女性保護者の人間度は男子73.7、女子79.6であり、好きな先生が最も高得点で、次が女性保護者、男性保護者の順であった。また、高校生の男女比較では、自分に対しては男子の方がやや高評価であるのに対し、周囲の大人に対しては、女子の方が高い数値を示していた。ただし、男性保護者に対しては男女とも同程度の意識であることが示された。
- \* 近年、友だち親子、先生に対するためぐち、など大人に対する接し方が変化しているが、その背景に、自分も周囲の大人と同じ程度だと思っているのかあるいは接し方の変化だけなのかどうかを人間度という指標を使って数値化を試みた。その結果、本人に対する評価と周囲の大人との間には2倍近い開きがあることから、全体としてみると、周囲の大人に対する親しげな（馴れ馴れしい）態度は、接し方の変化であり、本人も大人と同等であるという意識を持っているわけではない可能性が示唆された。

5. 周囲の大人への尊敬の程度の比較（問8、問13、問17）

- ・ 先生（本人がこれまで出会った先生の中で最も好きな先生に対する回答）への尊敬の程度は、「とても尊敬している」が男子43.3%、女子45.3%で、男性保護者を「とても尊敬している」と回答したものは、男子21.8%、女子19.1%、女性保護者では男子25.4%、女子36.4%という結果が示された。
- ・ 前述の人間度同様、高校生から見た男性保護者に対する尊敬は、かなり低いことが示された。
- ・ 本調査では、先生は、これまで出会った先生の中で最も好きな先生と定義しているため、先生全般に対する尊敬意識を代表する評価ではないが、先生、女性保護者、男性保護者の中では、男性保護者への尊敬の程度が一番低いことが明らかとなった。

6. 友人、先生、保護者を好きな理由（問3、問9、問14、問18）

- ・ 本調査では、一番親しい友人、先輩について尋ねたが、そのような人はいないは男女とも1%前後で極めて低率であった。その友人／先輩と一番親しい理由は、男女とも「気が合うから」、「何でも話せるから」が、上位2位で、男子では「おもしろいから」48.7%で3位で、女子では「優しいから」「おもしろいから」が続いた。
- ・ 本調査では、これまで出会った先生の中で最も好きな先生を選んでもらっているが、まず好きな先生がいないと答えた生徒は男子11.1%、女子10.4%と約1割は、これまでの16-17年の人生の中で好きな先生には出会っていなかった。好きな先生に出会った生徒の中で、その先生を好きな理由を尋ねた。男子で上位3つは、「おもしろいから」が49.1%、「熱心でいつも一生懸命だから」46.2%、「教え方がうまいから」41.2%、女子では、「熱心でいつも一生懸命だから」54.9%、「おもしろいから」53.0%、「優しいから」51.4%であった。
- ・ 同様に保護者のどのようなところが好きかを尋ねた。男性保護者では、「好きなのところはない」が男子14.3%、女子11.7%で、男性保護者の好きなのところの上位は、男子では「頼りになる」

41.9%、「困ったときに助けてくれる」35.0%、「信頼できる」33.8%、「優しい」32.7%で、女子では「優しい」42.2%、「困ったときに助けてくれる」39.4%、「頼りになる」37.4%、「おもしろい」33.8%であった。一方、女性保護者に関しては、女性保護者の好きなどころは、男子では「よく話を聞いてくれる」46.7%、「優しい」42.2%、「困ったときに助けてくれる」39.6%、「信頼できる」39.5%、女子では「よく話を聞いてくれる」60.3%、「困ったときに助けてくれる」57.1%、「信頼できる」48.1%であった。

- ・ 近年のお笑い番組の影響なのか、親しい / 好きな理由の中に、女性保護者以外では、友人、先生、男性保護者が好まれる要因の上位に「おもしろいから」という理由があげられていることが特徴的であった。

## 7. 学校の先生に対する保護者の態度 (問10)

- ・ 学校の先生に対する保護者の態度を尋ねた。「先生について何も話題にしない」が男女とも最も多く（男子43.9%、女子42.4%）、「先生のいうことは聞いたほうがよい」「先生のことを褒める」「先生に感謝している」などの肯定的態度は10-20%であった。「先生に対する不満を言う」などの否定的な態度は7-8%程度であり、先生への何らかのコメントをしている群では、肯定的な態度が多い傾向が観察された。
- ・ 問10と問8の先生に対する尊敬の程度をクロス集計してみると、親が先生に対する敬意を払っている言動をしている群では、生徒の先生に対する尊敬の程度が高く、生徒の先生に対する尊敬意識には、親が先生にどのような態度をとっているかが強く影響している可能性が示唆された。

## 8. 各種経験の割合 (問25)

- ・ 今年度の高校2年生のリスク行動を含む各種経験の割合を尋ねた。喫煙は男子7.0%、女子3.3%、飲酒は男子23.9%、女子26.4%、違法薬物（マリファナ等）使用は男子0.8%、女子0.2%、精神安定剤等（向精神薬）使用は男子2.8%、女子3.5%、万引きは男子4.2%、女子1.5%、自傷行為は男子4.0%、女子7.2%、交際は男子31.0%、女子40.1%、性関係は男子10.1%、女子13.3%であった。その他生活状況では、アルバイト経験は男子16.8%、女子26.5%、ピアスは男子4.5%、女子12.2%、化粧は男子2.0%、女子56.7%、眉の手入れは男子39.1%、女子73.0%、ヘアダイは男子8.2%、女子18.1%、いじめ（加害）は男子8.2%、女子4.7%、いじめ（被害）は男子7.2%、女子7.6%であった。

\*注：今年度は昨年度までに比べ、全体的に各種リスク行動がかなり低率であった。この結果は、昨年度よりも実際にリスク行動が減少しているのか、調査対象となった学校が、昨年度までの学校群と学校の特徴が異なるためなのかは、この調査からは判断できないが、数年来のリスク行動の継続研究の傾向から、今年度の対象者は、昨年度までの対象者に比べ、リスク行動をとる対象者の少ない学校が参加している可能性がある」と推測される。

## 9. 家庭学習、パソコン使用、ゲーム実施、ケータイ使用、テレビ視聴 (問26-30)

- ・ 家庭学習時間：塾での勉強時間も含めて、学校から帰宅後一日どれくらい学習するかを尋ねた。一日の家庭学習時間の平均値は男子50.6分、女子54.9分であり、昨年までの結果より家庭学習時間は長かった。
- ・ パソコン使用时间：高校2年生のパソコン所持率は男子80.1%、女子78.3%と約8割の生徒がパソコンを所持していた。次に、一日にどれくらいパソコンを使用するかを尋ねた。一日のパソコン使用時間の平均値は男子68.6分、女子47.3分であり、女子に比べ男子の方が長かった。
- ・ ゲーム実施時間：一日にどれくらいゲームをするかを尋ねた。一日のゲーム実施時間の平均値は男子50.0分、女子14.7分であり、女子に比べ男子の方が顕著に長かった。

- ・ **ケータイ使用時間**：高校2年生のケータイ所持率は男子95.6%、女子97.6%とほぼ全員がケータイを所持していた。次に、一日にどれくらいケータイを使用するかを尋ねた（見ている時間も含めて）。一日のケータイ使用時間の平均値は男子2.5時間、女子3.6時間であり、昨年までと同様、男子に比べ女子の方が長かった。
- ・ **テレビ視聴時間**：ニュースや教育番組を除いて、一日にどれくらいテレビを見ているかを尋ねた。一日のテレビ視聴時間の平均値は男子1.8時間、女子2.3時間であり、男子に比べ女子の方が長かった。

#### 10. **自己肯定感（問34）（問35）**

- ・ 「あなたには欠点がありますか？」という質問と「あなたにはいいところがありますか？」の2つの質問を組み合わせて、生徒を下記4群に分けた。それによると、自己肯定群（健全群）は男子62.7%、女子59.4%と6割前後であった。それに対し、自己否定群は男子34.6%、女子39.2%と3-4割であり、その他少数ではあるが、自分の欠点への認識が少なく、いい点だけを認識している自己愛群が、男子1.8%、女子0.9%存在し、自分のいいところも悪いところもないとする分析不能群が、男子0.9%、女子0.5%存在していた。今年度の結果は昨年の結果とほぼ同様であった。
- \*① 「自己肯定群」：「いいところ」とてもある＋少しある、「欠点」少しある＋とてもある
- \*② 「自己否定群」：「いいところ」あまりない＋まったくない、「欠点」とてもある＋少しある
- \*③ 「自己愛群」：「いいところ」とてもある＋少しある、「欠点」まったくない＋あまりない
- \*④ 「自己分析不能群」：「いいところ」まったくない＋あまりない、「欠点」まったくない＋あまりない

#### 11. **東北大震災の影響（問35）（問35）**

- ・ 東北大震災のあと何か考えが変わったかどうかを尋ねた。最も多かったのは「少し変わった」という回答で、男子55.5%、女子66.1%と60%前後であった。「非常に変わった」生徒は男子14.4%、女子16.8%、「何も変わらなかった」は男子15.1%、女子5.2%で、全体的に女子の方が、震災後、何らかの精神的な影響を受けていた。また、震災後の意識変化で被災地と被災地でない地域の生徒での意識差を調べた。その結果、当然のことではあるが、「非常に変わった」と回答した生徒が、被災地外では15%前後（男子12.2%、女子15.3%）であるのに対し、被災地の生徒では25%前後（男子23.0%、女子27.6%）と約10%高率であった。しかしながら、震災後気持ちの上で「何も変わっていない」と回答した生徒は、被災地と被災地以外の地域の差は3-5%と少なく、被災していない地域の生徒たちにも精神的な影響を受けている（無関心なわけではない）可能性が示唆された。
- ・ 前述の質問で何か変わったと回答した生徒に、具体的に何が変わったのかを尋ねた。  
上位にあがった回答は、男女とも同じで「自然災害の恐ろしさを感じるようになった」、「自分の今の状況（人間関係・環境など）の大切さをあらためて考えるようになった」、「命の大切さを考えるようになった」であった。

#### 12. **自分に対する価値観（問41）**

- ・ 「どういうときに自分に価値があると思いますか」ということを尋ねた。男女とも1位は「誰かの役に立っているとき」（役立ち感）で、男子59.7%、女子72.0%で、男女とも役立ち感を感じるときに自分の価値を見出していたが、特に女子でその傾向が顕著であった。2位以降は男女で違いが見られ、男子では、2位「何か他の人よりもよくできたこと」（相対評価）、3位は「他の人たちが自分を評価したとき」（他者からの評価）、4位「グループ内で人間関係がうまくいっているとき」

(友人関係)、5位「友人から好かれているとき」(友人関係)の順であった。一方、女子では、2位「友人から好かれているとき」(友人関係)、3位「他の人たちが自分を評価したとき」(他者からの評価)、4位「何か他の人よりもよくできたとき」(相対評価)、5位「グループ内で人間関係がうまくいっているとき」(友人関係)の順で、高校生が自分自身に価値があると感じるのは、役立ち感、良好な友人関係、他者からの評価、他者との比較で勝っていたときであった。価値観の最上位であった役立ち感に関しては、高校生の自尊心を向上させるためにも、ぜひ考慮すべき点であると考えられた。また、自分の価値について友人関係が大きなウェイトを占めている点は、コミュニケーション力の著しい低下や友人間の相互依存関係等、今後、高校生に関する課題である可能性が示唆された。

### 13. 社会性の程度（ニート・引きこもり尺度）（問42-1～問42-8）

- ・ 高校生の社会性を測定するために、8つの質問をした。①「将来、何をしたいのかよくわからない」に「とてもそう思う」と強く同意している生徒は男子26.3%、女子22.3%と20-30%もの生徒が自分のしたいことが見つけられずにいた。②「自分は人と同じくらいのことができ、将来役に立つと思う」という質問では、全く役に立たないと思っている生徒が男女とも6%程度存在していた。③「嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあう努力をしている」は、「少しそう思う」という消極的な同意が最も多く、男子36.5%、女子44.9%と40%前後であったが、「まったくそう思わない」という関係性を築く努力を完全拒否している群は男子8.8%、女子4.3%であった。④「困ったときに相談できる人がいる」では、男子5.5%、女子2.9%が相談できる相手をまったく持っていないと回答していた。⑤「勉強しておくことは将来のために必要だと思う」で完全否定している群は男子2.7%、女子1.2%存在した。⑥「人付き合いが苦手だと思う」に強く肯定している群は男子12.1%、女子9.1%と10%前後もの生徒がコミュニケーションに苦手意識を持っていた。⑦「自分に自信が持てない」に強く同意している群は男子23.5%、女子31.3%と極めて多数の生徒が自信を持っていなかった。⑧「自分は誰にも必要だと思われていないときがある」では強い同意は男子15.1%、女子19.3%とこれもかなりの高率に達していた。

### 14. 能動的（受動的）生活態度（問43-1～問43-6）

- ・ 高校生の能動的生活態度を測定するために、6つの質問をした。①「いつも誰かの指示にしたがっている」に強く同意している受動的な生徒は男子5.4%、女子3.0%存在した。②「自分でしっかり計画を立て、行動している」という質問では、強く否定している群が男子10.0%、女子6.5%と10%弱の生徒が無計画な生活を送っていた。③「その日その日を自由に気楽に過ごしている」は、強く肯定している現状に流されている群は、男子28.1%、女子22.8%と20-30%前後もの生徒がその日その日の気楽さに流されて生きていた。④「先のことまでは、あまり考えずに生きている」に強く肯定している群は、男子18.2%、女子13.3%と、10-20%近くの生徒が先のことまで考えずに暮らしているということが示された。⑤「毎日がとても充実している」を強く否定している群は男子6.0%、女子3.9%存在した。⑥「つらくても目標に向かって努力している」に強く否定している群は男子5.2%、女子4.4%と5%前後が努力を放棄していることが明らかとなった。

### 15. 将来大切なこと（問45-1～問45-13）

- ・ 「将来あなたにとって大切なことは何ですか」に関して13の質問をした。次の項目に対し、非常に大切であると思っている割合を示す。男子が自分の将来について大切に思っていることを高い順に並べると①「健康であること」79.8%、②「やりがいのある職業につくこと」は71.2%、③「愛する人を大切にすること」は70.5%、④「あたたかい家族を作ること」では65.6%、⑤「自立した

生活を送ること」は64.6%、⑤「心穏やかに生活すること」は64.6%、⑥「努力して何かを成し遂げること」は60.3%、⑦「趣味に没頭する時間があること」は55.3%、⑧「世の中の役に立つこと」は48.5%、⑨「高い収入を得ること」は40.7%、⑩「仕事で出世すること」は36.5%、⑪「外見がカッコいい・美しい人であること」は17.8%、⑫「努力しないでよい結果を得ること」は14.4%という結果が得られた。一方、女子が自分の将来について大切だと思っていることを順番に記すと、①「健康であること」81.8%、②「愛する人を大切にすること」72.0%、③「心穏やかに生活すること」71.5%、④「あたたかい家族を作ること」71.2%、⑤「やりがいのある職業につくこと」71.1%、⑥「自立した生活を送ること」62.2%、⑦「努力して何かを成し遂げること」59.6%、⑧「趣味に没頭する時間があること」50.5%、⑨「世の中の役に立つこと」48.2%、⑩「高い収入を得ること」27.9%、⑪「仕事で出世すること」26.7%、⑫「外見がカッコいい・美しい人であること」17.9%、⑬「努力しないでよい結果を得ること」6.5%の順であった。

## ■ 「自己否定群／自己分析不能群」：自己肯定感の低い高校生の背景因子

- \* 本分析では、高校生の調査の間34の回答を、下記のように分類した。
- \*① 「自己肯定群」：「いいところ」とてもある＋少しある、「欠点」少しある＋とてもある
- \*② 「自己否定群」：「いいところ」あまりない＋まったくない、「欠点」とてもある＋少しある
- \*③ 「自己愛群」：「いいところ」とてもある＋少しある、「欠点」まったくない＋あまりない
- \*④ 「自己分析不能群」：「いいところ」まったくない＋あまりない、「欠点」まったくない＋あまりない

上記②と④の群を自己肯定感の低い群、①と③を自己肯定感の高い群と定義した。

- \* 自己肯定感が低いことに関連する要因を検討した。
- \* 提示している関連は特に顕著なもの（統計学的に有意のもの）を示す。
- \* ここでは、OR の値が高いほど関連が強いことを示す。  
(つまり、ここでは数値が高いほど、自己肯定感が低いことを意味する)
- \* OR 値が3を超える特に関連の強いものは太字で提示している。

### 1. 人間関係

#### ● 友人／先輩への信頼関係

- \* 一番親しい友人／先輩を思い浮かべての回答  
「とても信頼している」(全体的信頼)群では自己肯定感が低い人が最も低く、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。
  - ・ **まあまあ信頼している (男子 OR = 1.4、女子 OR = 1.4)**
  - ・ **どちらとも言えない (男子 OR = 3.5、女子 OR = 4.1)**
  - ・ **まったく／あまり信頼していない (男子 OR = 3.9、女子 OR = 3.4)**
  - ・ **そのような友達・先輩はいない (男子 OR = 4.3、女子 OR = 6.9)**

★ 友人／先輩に対する信頼感が低いほど、自己肯定感が低い。親しい友人／先輩がない場合が最も低い

#### ● クラスの授業中の雰囲気との関係

「クラスがとても落ち着いてよくまとまっている」群では自己肯定感が低い人が最も低く、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ **どちらとも言えない (男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.7)**
- ・ **一部の生徒が勝手な行動をとっている (男子 OR = 1.4、女子 OR = 2.0)**
- ・ **クラス全体がバラバラでほとんどの生徒が勝手な行動をとっている (男子 OR = 3.0、女子 OR = 2.7)**

★ クラスの授業中のまとまりがないほど、自己肯定感が低い

## ● 人間度との関係

- \* 人間度の定義：本人が世の中で一番尊敬している人の人間度を100度とした場合、本人、先生、男性保護者、女性保護者の人間度をどのくらいかをたずねた。

自己肯定感の群別の各人間度を表に示した。

### (1) 本人の人間度（自己評価）との関係

自己否定群では、自己肯定群に比べると、本人の人間度が15ポイント近く低いことが示された。自己愛群においては、男女とも自己肯定群よりもさらに高い自己評価をしており、その傾向は男子で顕著であった。また分析不能群でも、男子では非常に高い値を示しており、自己愛群、分析不能群では、自分を客観視できてない可能性が示唆された。

表1. 「本人の人間度」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	32.1	46.3	71.9	76.6
女子	32.8	46.0	54.7	42.6

### (2) 先生の人間度との関係

全体的に見て、男女とも自己肯定群における先生の人間度評価が最も高かった。自己否定群を自己肯定群と比較すると、2ポイント程度わずかに低値を示していたが、本人評価ほどの差異はなかった。分析不能群男子においては、先生への点が自己評価点よりも低いという結果であり、上記と同じく、先生よりも自分が上であるという自分自身を客観視できていない可能性がうかがわれた。

表2. 「好きな先生の人間度」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	79.4	81.5	78.3	66.9
女子	81.9	83.9	78.7	61.1

### (3) 男性保護者の人間度との関係

全体的に見て、男女とも自己肯定群における男性保護者の人間度が最も高かった。自己否定群を自己肯定群と比較すると、7-8ポイント程度低値を示していた。自己愛群、分析不能群男子においては、男性保護者への点が自己評価点よりも低いという結果であり、上記と同じく、男性保護者よりも自分が上であるという自分自身を客観視できていない可能性がうかがわれた。分析不能群女子における男性保護者の人間度は先生、女性保護者全体の中で著しく低い値を示していた。

表3. 「男性保護者の人間度」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	65.4	72.0	70.9	71.5
女子	64.4	72.8	66.1	41.9

### (4) 女性保護者の人間度との関係

全体的に見て、男女とも自己肯定群における女性保護者の人間度が最も高かった。自己否定群を自己肯定群と比較すると、男性保護者の場合と同じく7-8ポイント程度低値を示していた。分析不能群においては、男女とも女性保護者の人間度が最低値を示していた。

表4. 「女性保護者の人間度」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	69.7	76.1	71.2	63.9
女子	75.3	82.6	74.4	64.8

- ★ 自己否定群では、自分に対する人間度が低かった。両親に対する評価の低さが本人の自己肯定感の低さと関連している可能性が示唆された。



● 先生に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 1.4、女子 OR = 1.7)
- ・ あまり／まったく尊敬していない (男子 OR = 1.9)

★ 先生に対する尊敬の程度と高校生の自己肯定感は大きく影響していない

● 男性保護者に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ尊敬している (男子 OR = 1.3、女子 OR = 1.4)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 1.7、女子 OR = 2.1)
- ・ あまり尊敬していない (男子 OR = 1.9、女子 OR = 2.2)
- ・ **まったく尊敬していない (男子 OR = 2.6、女子 OR = 3.8)**

\* 男性保護者がいないことと自己肯定感の低さにはほとんど関係していない (女子 OR = 1.4)。

★ 男性保護者(父親等)に対する尊敬の意識が低いほど、本人の自己肯定感も低い。特に、女子でこの傾向が顕著である。

● 女性保護者に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ尊敬している (男子 OR = 1.4、女子 OR = 1.4)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.5)
- ・ あまり尊敬していない (男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.2)
- ・ **まったく尊敬していない (男子 OR = 2.3、女子 OR = 5.3)**

\* 女性保護者がいないことと自己肯定感の低さはほとんど関係していない (女子 OR = 1.7)。

★ 女性保護者(母親等)に対する尊敬の意識が低いほど、本人の自己肯定感も低い。特に、女子でこの傾向が顕著であり、男性保護者より女性保護者への尊敬の程度との関連が強い。

● 友だち関係の中のできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.6)

★ 友達関係の中のできごとで、思い出に残ることが何もない群では、自己肯定感が低くなる。

● 先生との関係の中のできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 非常につらいことがあった (男子 OR = 2.1、女子 OR = 1.7)

- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 2.7、女子 OR = 2.6)

★ 先生との関係の中でのできごとで、非常につらい経験や思い出に残ることが何もない群では、自己肯定感が低くなる。

● 家族との関係の中でのできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 非常につらいことがあった (男子 OR = 2.1、女子 OR = 2.3)
- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 2.9、女子 OR = 2.7)

★ 家族との関係の中でのできごとで、非常につらい経験や思い出に残ることが何もない群では、自己肯定感が低くなる。

★ 友だち、先生、家族とのできごとを比較すると、自己肯定感の低さについては友だちとのできごととの影響が最も少ない=大人との関係の影響が強い

● 保護者が子どもの意見の受け入れ程度と自己肯定感との関係

「自分の意見はよく聞いてもらえる」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ ある程度聞いてもらえる (男子 OR = 4.7、女子 OR = 1.8)
- ・ 聞いてもらえるときと聞いてもらえないときと半々である (男子 OR = 7.1、女子 OR = 2.5)
- ・ 聞いてもらえない時の方が多い (男子 OR = 10.6、女子 OR = 5.2)
- ・ まったく聞いてもらえない (親の指示に従う) (男子 OR = 18.8、女子 OR = 51.3)

★ 保護者が子どもの意見に耳をかさないほど、自己肯定感が顕著に低くなる。

★ 全項目の中で、最も影響が大きい！

● 学校の成績と自己肯定感との関係

「トップレベル」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 真ん中くらい (男子 OR = 1.5)
- ・ 中の下くらい (男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.3)
- ・ かなり下くらい (男子 OR = 3.0、女子 OR = 3.1)
- ・ わからない (男子 OR = 3.7、女子 OR = 6.6)

★ 学校の成績が低いほど、自己肯定感が低くなる。女子でその傾向が顕著である。

● 学習以外の活動状況 (部活・習い事等) と自己肯定感との関係

「非常に熱心に行っている」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ熱心に行っている (男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.4)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 2.1、女子 OR = 2.5)
- ・ しかたなくやっている (男子 OR = 3.8、女子 OR = 2.2)

- ・ 以前はしていたが今はしていない（男子 OR = 2.7、女子 OR = 2.5）
- ・ したことがない（男子 OR = 2.6、女子 OR = 3.9）

★ 学習以外の活動を「しかたなくやっている」「したことがない」と、自己肯定感が低い。

● **各種リスク行動の経験と自己肯定感との関係**

「リスク行動を行っている」群では自己肯定感が低い人が少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 喫煙（女子 OR = 1.5）
- ・ 精神安定剤などの向精神薬使用（女子 OR = 2.2）
- ・ 自傷行為（男子 OR = 2.4、女子 OR = 2.5）
- ・ ピアス（女子 OR = 1.5）
- ・ いじめられた（男子 OR = 1.5、女子 OR = 1.3）

● **各種実施時間と自己肯定感の関係**

自己肯定感の群別に各実施時間／頻度を表に示した。

(1) 家庭学習時間（分／日）との関係

一日の家庭学習時間（分）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群の家庭学習時間が6－10分短かった。

表5. 「家庭学習時間（分／日）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	46.6	52.1	74.2	60.9
女子	49.5	59.0	52.8	16.2

(2) パソコン使用時間（分／日）との関係

一日のパソコン使用時間（分）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群のパソコン使用時間が10－17分長かった。

表6. 「パソコン使用時間（分／日）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	79.8	62.0	81.3	51.1
女子	53.3	43.1	71.5	67.5

(3) ゲーム実施時間（分／日）との関係

一日のゲーム実施時間（分）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群のゲーム実施時間が6－12分長かった。

表7. 「ゲーム実施時間（分／日）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	58.5	46.0	43.8	35.1
女子	18.0	12.3	21.6	45.4

(4) ケータイ使用時間（時間／日）との関係

一日のケータイ使用時間（時間）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群のケータイ使用時間は男子ではほとんど差がなかったが、女子では1時間近く長かった。

表8. 「ケータイ使用時間（時間／日）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	2.5	2.4	4.0	1.9
女子	4.3	3.4	4.2	4.5

(5) 遅刻頻度（回／週）との関係

一週間の遅刻頻度（回）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群の遅刻回数は男女とも多かったが、特に女子で差が大きかった。また、自己愛群男女、分析不能群女子の遅刻回数が多かった。

表9. 「遅刻回数（回／週）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	0.29	0.27	0.85	0.16
女子	0.33	0.22	0.36	1.14

(6) 欠席頻度（回／週）との関係

一週間の欠席頻度（回）を自己肯定感の群別に比較した。自己肯定群に比べ自己否定群の欠席回数は男女とも多かったが、特に女子で差が大きかった。また、自己愛群男女、分析不能群女子の欠席回数が多かった。

表10. 「欠席回数（回／週）」と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	0.32	0.27	0.48	0.20
女子	0.39	0.27	0.42	0.67

● 日常の多忙度と自己肯定感との関係

「とても忙しい」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ あまり忙しくない（男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.5）
- ・ 全く忙しくない（男子 OR = 4.8、女子 OR = 2.6）

★ 日常が忙しくないほど（暇なほど）、自己肯定感が低い。

● 学習意欲と自己肯定感との関係

「非常に頑張りたいと思う」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 少し頑張ろうと思う（男子 OR = 1.4、女子 OR = 1.6）
- ・ ほとんど頑張ろうと思わない（男子 OR = 1.7、女子 OR = 2.7）

★ 学習意欲が少ないほど、自己肯定感が低い傾向がある。

● 学習以外の活動（部活・趣味など）意欲と自己肯定感との関係

「非常に頑張りたいと思う」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 少し頑張ろうと思う（男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.8）
- ・ ほとんど頑張ろうと思わない（男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.5）
- ・ そのようなことをしていない（男子 OR = 3.0、女子 OR = 2.8）

★ 学習以外の活動意欲が少ないほど、自己肯定感が低い。学習意欲よりも影響が大きい。

● 人より目立つことに対する態度と自己肯定感との関係

人より目立つことが「とても大切」と感じる群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準

OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ あまり大切でない (男子 OR = 2.4、女子 OR = 1.7)
- ・ まったく大切でない (男子 OR = 5.0、女子 OR = 4.4)

★ 人より目立ちたくないほど (=人と同じでいたい)、自己肯定感が低い。

● 社会性の程度と自己肯定感との関係

高校生の社会性を測定するために、8つの質問をした。各質問を点数化し0-100点までの社会性スコアとし、点数が低いほど社会性が低いことを示す。自己肯定群と自己否定群の社会性スコアを比較すると、自己否定群の方が社会性スコアが12点程度低いことが示された。また、自己愛群では男女とも社会性スコアが高値を示していた。

表11. 「社会性」(0-100点) と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	55.8	67.0	69.8	58.5
女子	56.3	67.8	74.0	58.3

★ 社会性が低い群 (ニート、引きこもり関連群) は、自己肯定感が低い。

● 能動的生活意欲の程度と自己肯定感との関係

高校生の能動的生活意欲を測定するために、6つの質問をした。各質問を点数化し0-100点までの能動的生活意欲スコアとし、点数が低いほど能動的生活意欲が低いことを示す。自己肯定群と自己否定群の社会性スコアを比較すると、自己否定群の方が社会性スコアが6点程度低いことが示された。また、自己愛群では男女とも能動的生活意欲スコアが高値を示していた。

表12. 「能動的生活尺度」(0-100点) と自己肯定感との関係

	自己否定群	自己肯定群	自己愛群	分析不能群
男子	55.0	61.3	62.7	58.0
女子	57.0	63.3	66.0	59.7

★ 能動的生活意欲が低い群 (指示待ちタイプ) は、自己肯定感が低い。

● 将来の社会への貢献意欲と自己肯定感との関係

「とても役立ちたいと思う」群では自己肯定感が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は自己肯定感の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ役立ちたいと思う (男子 OR = 1.5、女子 OR = 1.6)
- ・ 役立ちたいという気持ちはあまりない (男子 OR = 2.9)
- ・ どうでもよい (男子 OR = 5.1、女子 OR = 5.1)

★ 将来の社会への貢献意欲が少ないほど、自己肯定感が低い。特に社会貢献などはどうでもいいと考えている群の自己肯定感は著しく低い。

## ■ 「社会性（ニート・引きこもり）尺度」：社会性の低い高校生の背景因子

\* 本分析では、高校生の調査の間42中の質問8項目の回答の総合得点をスコア化（20点～100点）し、点数が低いほど社会性が低いことを意味する。下記のように分類した。

\*① 「社会性の低い群」：「20～55点」

\*② 「社会性が中程度群」：「58～70点」

\*③ 「社会性の高い群」：「73～100点」

上記①群の社会性の低い群、②と③の社会性中程度以上の群とを比較した。

\* 社会性が低いことに関連する要因を検討した。

\* 提示している関連は特に顕著なもの（統計学的に有意のもの）を示す

\* ここでは、OR の値が高いほど関連が強いことを示す。

（つまり、ここでは数値が高いほど、社会性が低いことを意味する）

\* OR 値が3を超える特に関連の強いものは太字で提示している。

## 2. 人間関係

### ● 友人／先輩への信頼関係

\* 一番親しい友人／先輩を思い浮かべての回答

「とても信頼している」（全面的信頼）群では社会性が低い人が最も低く、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ信頼している（男子 OR = 1.8、女子 OR = 1.9）
- ・ どちらとも言えない（男子 OR = 4.8、女子 OR = 4.0）
- ・ まったく／あまり信頼していない（男子 OR = 4.6、女子 OR = 5.7）
- ・ そのような友達・先輩はいない（男子 OR = 7.3、女子 OR = 7.9）

★ 友人／先輩に対する信頼感が低いほど、社会性が低い。親しい友人／先輩がない場合が最も低い

### ● クラスの授業中の雰囲気との関係

「クラスがとても落ち着いてよくまとまっている」群では社会性が低い人が最も低く、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ落ち着いている（男子 OR = 1.5、女子 OR = 1.3）
- ・ どちらとも言えない（男子 OR = 2.3、女子 OR = 1.7）
- ・ 一部の生徒が勝手な行動をとっている（男子 OR = 2.4、女子 OR = 2.7）
- ・ クラス全体がバラバラでほとんどの生徒が勝手な行動をとっている（男子 OR = 5.2、女子 OR = 3.3）

★ クラスの授業中のまとまりがないほど、社会性が低い

### ● 人間度との関係

\* 人間度の定義：本人が世の中で一番尊敬している人の人間度を100度とした場合、本人、先生、男性保護者、女性保護者の人間度をどのくらいかをたずねた。

社会性の群別の各人間度を表に示した。

(5) 本人の人間度（自己評価）との関係

社会性の低い群では、社会性の高い群／社会性中程度の群に比べると、本人の人間度が15ポイント近く低いことが示された。社会性の中程度の群と社会性の高い群との差は5ポイント程度と差が小さい。

表1. 「本人の人間度」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	32.9	43.5	48.9
女子	31.2	42.1	48.6

(6) 先生の間度との関係

全体的に見て、男女とも社会性の高い群における先生の間度評価が最も高かった。社会性の低い群では、社会性の高い群／社会性中程度の群に比べると、先生の間度が3-6ポイント近く低いことが示されたが、差は小さい。

表2. 「好きな先生の間度」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	77.9	80.3	83.8
女子	81.6	82.7	85.0

(7) 男性保護者の人間度との関係

全体的に見て、男女とも社会性の高い群における男性保護者の人間度評価が最も高かった。社会性の低い群では、社会性の高い群／社会性中程度の群に比べると、男性保護者の人間度が7-12ポイント近く低いことが示された。先生の間度の群別の差異よりも大きかった。

表3. 「男性保護者の人間度」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	63.0	70.4	75.3
女子	62.4	69.5	76.9

(8) 女性保護者の人間度との関係

全体的に見て、男女とも社会性の高い群における女性保護者の人間度評価が最も高かった。社会性の低い群では、社会性の高い群／社会性中程度の群に比べると、女性保護者の人間度が8-14ポイント近く低いことが示された。先生の間度の群別の差異よりも大きかった。

表4. 「女性保護者の人間度」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	66.5	74.4	80.3
女子	74.2	79.7	85.3

★ 社会性の低い群では、自分に対する人間度が低かった。両親に対する評価の低さが本人の社会性の低さと関連している可能性が示唆された。

● 先生に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ尊敬している (男子 OR = 1.6、女子 OR = 1.4)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 1.7、女子 OR = 2.0)
- ・ あまり／まったく尊敬していない (男子 OR = 3.0)

★ 先生に対する尊敬の程度が低いほど、高校生の社会性の低い傾向がある

● 男性保護者に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ尊敬している (男子 OR = 1.4、女子 OR = 1.4)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 2.1、女子 OR = 1.9)
- ・ あまり尊敬していない (男子 OR = 2.2、女子 OR = 2.4)
- ・ まったく尊敬していない (男子 OR = 3.7、女子 OR = 3.8)
- \* 男性保護者がいないことと社会性の低さにはそれほど関係していない (男子 OR = 1.9、女子 OR = 2.1)。

★ 男性保護者（父親等）に対する尊敬の意識が低いほど、本人の社会性が低い。

● 女性保護者に対する尊敬の程度との関係

「とても尊敬している」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ尊敬している (男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.5)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 3.1、女子 OR = 2.3)
- ・ あまり尊敬していない (男子 OR = 3.7、女子 OR = 2.9)
- ・ まったく尊敬していない (男子 OR = 4.4、女子 OR = 3.5)
- \* 女性保護者がいないことと社会性の低さは関係していない。

★ 女性保護者（母親等）に対する尊敬の意識が低いほど、本人の社会性が低い。特に、女子よりも男子でこの傾向が顕著であり、男性保護者より女性保護者への尊敬の程度との関連が強い。

● 友だち関係の中のできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 非常にづらいことがあった (男子 OR = 3.9、女子 OR = 2.1)
- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 3.4、女子 OR = 3.5)

★ 友だちとの関係の中のできごとで、非常にづらい経験や思い出に残ることが何もない群では、社会性が低くなる。

● 先生との関係の中のできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率]として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 非常にづらいことがあった (男子 OR = 2.5、女子 OR = 2.4)
- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 2.5、女子 OR = 2.3)

★ 先生との関係の中のできごとで、非常にづらい経験や思い出に残ることが何もない群では、社



社会性が低い。

● 家族との関係の中でのできごととの自己肯定感との関係

「非常に嬉しいことがあった」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 非常につらいことがあった (男子 OR = 2.2、女子 OR = 2.4)
- ・ 特に思い出に残ることはなかった (男子 OR = 2.8、女子 OR = 2.6)

★ 家族との関係の中でのできごとで、非常につらい経験や思い出に残ることが何もない群では、社会性が低い。

★ 友だち、先生、家族とのできごとを比較すると、社会性の低さについては友だちとのできごとの影響が最も大きい／強い

● 保護者が子どもの意見の受け入れ程度と社会性との関係

「自分の意見はよく聞いてもらえる」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 聞いてもらえるときと聞いてもらえないときと半々である (男子 OR = 2.7)
- ・ 聞いてもらえない時の方が多い (男子 OR = 4.9、女子 OR = 2.4)
- ・ まったく聞いてもらえない (親の指示に従う) (男子 OR = 2.4、女子 OR = 3.9)

★ 保護者が子どもの意見に耳をかさないほど、社会性が低くなる。

★ 自己肯定感と違いこの項目の影響は他の項目と同程度である。

● 学校の成績と自己肯定感との関係

「トップレベル」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 真ん中くらい (男子 OR = 1.7)
- ・ 中の下くらい (男子 OR = 2.1、女子 OR = 2.3)
- ・ かなり下くらい (男子 OR = 3.3、女子 OR = 3.1)
- ・ わからない (男子 OR = 3.9、女子 OR = 4.7)

★ 学校の成績が低いほど、社会性が低い。

● 学習以外の活動状況 (部活・習い事等) と社会性との関係

「非常に熱心に行っている」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ熱心に行っている (男子 OR = 1.7、女子 OR = 1.6)
- ・ どちらとも言えない (男子 OR = 2.2、女子 OR = 2.5)
- ・ しかたなくやっている (男子 OR = 5.1、女子 OR = 3.4)
- ・ 以前はしていたが今はしていない (男子 OR = 3.4、女子 OR = 3.0)
- ・ したことがない (男子 OR = 4.3、女子 OR = 4.4)

★ 学習以外の活動を「しかたなくやっている」「したことがない」と、社会性がかなり低い。

● **各種実施時間と社会性の関係**

自己肯定感の群別に各実施時間／頻度を表に示した。

(7) 家庭学習時間（分／日）との関係

一日の家庭学習時間（分）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群の家庭学習時間が20分以上短かった。

表5. 「家庭学習時間（分／日）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	39.9	52.1	59.3
女子	45.2	53.9	69.0

(8) パソコン使用時間（分／日）との関係

一日のパソコン使用時間（分）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群のパソコン使用時間が30-40分も長かった。

表6. 「パソコン使用時間（分／日）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	90.5	65.8	49.5
女子	62.2	45.4	34.8

(9) ゲーム実施時間（分／日）との関係

一日のゲーム実施時間（分）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群のゲーム実施時間が15-30分長かった。

表7. 「ゲーム実施時間（分／日）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	65.3	48.7	36.6
女子	23.2	12.8	8.6

(10) ケータイ使用時間（時間／日）との関係

一日のケータイ使用時間（時間）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群のケータイ使用時間は男子ではほとんど差がなかったが、女子では1時間近く長かった。

表8. 「ケータイ使用時間（時間／日）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	2.4	2.6	2.4
女子	4.2	3.7	3.4

(11) 遅刻頻度（回／週）との関係

一週間の遅刻頻度（回）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群の遅刻回数は男女とも多かったが、特に女子で差が大きかった。

表9. 「遅刻回数（回／週）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	0.33	0.28	0.27
女子	0.34	0.26	0.17

(12) 欠席頻度（回／週）との関係

一週間の欠席頻度（回）を社会性の群別に比較した。社会性の高い群に比べ社会性の低い群の欠席回数は男女とも多かったが、特に女子で差が大きかった。

表10. 「欠席回数（回／週）」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	0.35	0.28	0.23
女子	0.41	0.30	0.25

● **日常の多忙度と自己肯定感との関係**

「とても忙しい」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ あまり忙しくない（男子 OR = 1.9、女子 OR = 2.0）
- ・ 全く忙しくない（男子 OR = 4.0、女子 OR = 3.5）

★ 日常が忙しくないほど（暇なほど）、社会性が低い。

● **学習意欲と自己肯定感との関係**

「非常に頑張りたいと思う」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ 少し頑張ろうと思う（男子 OR = 2.0、女子 OR = 2.2）
- ・ ほとんど頑張ろうと思わない（男子 OR = 3.7、女子 OR = 4.3）

★ 学習意欲が少ないほど、社会性が低い。

● **学習以外の活動（部活・趣味など）意欲と社会性との関係**

「非常に頑張りたいと思う」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ かなり頑張りたいと思う（男子 OR = 1.3、女子 OR = 1.6）
- ・ 少し頑張ろうと思う（男子 OR = 1.9、女子 OR = 1.6）
- ・ ほとんど頑張ろうと思わない（男子 OR = 2.2、女子 OR = 2.8）
- ・ そのようなことをしていない（男子 OR = 2.6、女子 OR = 2.6）

★ 学習以外の活動意欲が少ないほど、社会性が低い。

● **人より目立つことに対する態度と社会性との関係**

人より目立つことが「とても大切」と感じる群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ あまり大切でない（男子 OR = 2.3、女子 OR = 1.4）
- ・ まったく大切でない（男子 OR = 5.8、女子 OR = 3.2）

★ 人より目立ちたくないほど（=人と同じでいたい）、社会性が低い。

● **将来の社会への貢献意欲と社会性との関係**

「とても役立ちたいと思う」群では社会性が低い人が最も少なく、これを基準 OR = 1 [倍率] として算出。OR は社会性の低い群の出現の倍率を示す。

- ・ まあまあ役立ちたいと思う（男子 OR = 2.2、女子 OR = 1.9）
- ・ 役立ちたいという気持ちはあまりない（男子 OR = 4.3、女子 OR = 4.7）

- ・ 役立ちたいという気持ちはまったくない (男子 OR =5.9、女子 OR =7.7)
- ・ どうでもよい (男子 OR =7.0、女子 OR =7.0)

★ 将来の社会への貢献意欲が少ないほど、社会性が低い。全項目の中で最も関係が強い。

● **能動的生活意欲と社会性との関係**

能動的生活意欲が高いほど、社会性も高く、両者は密接に関連している。

表11. 「能動的生活態度」と社会性との関係

	社会性の低い群	社会性中程度の群	社会性の高い群
男子	51.7	59.7	66.3
女子	54.3	60.7	68.0

★ 能動的生活意欲が低い (指示待ちであるほど) ほど、社会性が低い。